

親鸞における二河譬の意義

養島 和潤

親鸞は二河譬について主著『教行信証』(広本と略称)を初めとして『愚禿鈔』、『文類聚鈔』、『高僧和讃』、『一多証文』、『御消息集』そして引文のみであるが『観経集註裏書』などの多く著作の上で論述している。これらを一瞥してみてもこの文は師法然との出会いの時より晩年に至る迄、深く刻印され関心を持ち続けられた個処であることが付度される。二河譬の扱いには教学上多くの問題を含み、又この充分な理解の為には三心釈に於ける三心相互の緊密な内的連関の究明を得なければならぬ。しかし今は保留し当文に沿って次の二点に絞って概観することにする。

二河譬の文は善導では『観経疏』の「散善義」の三心釈中回向発願心の処で語られ、親鸞は広本では信巻に引き、そして大信釈と欲生釈の処で解釈している。ところで親鸞は善導の三心釈の引用解釈に際しては周知の如く訓み変え、削除、切断配当変えといった操作を敢えて行っている。この手続の内に親鸞の解釈方法及びそれが基づく処の信体験の問題が含まれていると見ることが出来る。結論を先取することが許されるならば、この解釈方法とは『方便化身土巻』で三経三心の一異を論ずる上で展開される顕彰隱密の釈義を指し、従つて三願転入の課題と応ずるものであること、そしてこの信巻に於ける二河譬の文と釈は化身土巻とよく対映し合う個処である

ことが推察されるのである。

最初に二河譬に出る旅人(行者)の心理の移行進展に対する親鸞の問題意識を追つてみよう。大雑把に見れば、当文では西方浄土往生を求めて何かの方法でもつて修し行じていく訳であるが、生死の間に触発されて歩み出し、西向↓三定死に直面しての念言・思念↓二尊の発遣・招喚に應ずる決定信願↓群賊の喚戻しに対する不回頭↓一心直進↓捨命後彼岸・善友相見慶樂という道程を経ている。これに対する親鸞の諸解釈を検討すれば、この推移を追求する洞見の内には死(無常)の問題↓三定死に逢着しての有限性の体認と絶望↓罪障の自覚↓自力執心の発掘といった事柄が看取され、善導と特に自力執心について微妙な差異を見せ、又死の扱いも従つて慶樂の扱いも相異したものになっている。ここには化身土巻で三願の各段階を扱つて抉出され取上げられるのと同じ性格の問題と扱い方が指摘し得るであろう。

次に転じて白道の解釈について検討すると、信巻や愚禿鈔で示す如く、白道四五寸のことは自体を分解してしまい善導の意味を汲みつつ全く異なつた意味を与えている。そして愚禿鈔・高僧和讃の文を見れば、決定以前の過程を具体的に方便假門・定散二心としており、そこに真仮を見ていることが分る。このことを考慮に入れて、善導では白道四五寸の能生清淨願往生心に対する親鸞の解釈の仕方を見ると、何故かくも複雑な手続をなし苦心しているのかという疑問が起きるのである。これは三心に対する両者の解釈及び配慮の相異が背景になつて生じてきたものであると思惟される。今はこの問題について極く一端に触れるにすぎない。能生清淨願往生心の語句に於いて、能生は善導では「能く生ず」と訓むのが穩当であり、

主体は衆生である。親鸞は「能く生ぜしむ」として如来回向の義にとり(広本)、主体は如来である。この点で文類聚鈔¹⁰⁾は「能く生ず」としているが「大悲回向の心なるが故に」とあるから如来回向の義である。善導ではこの清淨願往生心は微少であつても煩惱に妨げられながらも生死の間に触発され生起した衆生の志向的願往生心である。更にこの心に清淨なると冠している処に一層問題を生む素地が伏在していたと思われる。同じ願力の道に乗ずるとしていても、善導の三心釈を特に至誠心に限つて次の三要素についてみると、そこには真実心の要請策励と虚仮雜毒の現実相、そして弥陀因中の行の真実清淨さという關係自体既に矛盾するものを含んでいる。又少数の先輩が指摘されている点であるが、三心相互の間で至誠心と機の深信とが、そして法の深信と回向発願心とが相抵触し矛盾するという關係があり、これは親鸞によつて開示されたものであるという。言い換れば真実心の追求に於いて善導は矛盾の相そのままに呈示し、親鸞はその意中を自らにひきあて仮借なく突詰めていつたことによつて洞見し得たといえよう。至誠心釈で示す虚仮雜毒の自覚が徹底され、そのことは弥陀の真実清淨さの強調となり、真実の検討の標準の意義を透徹したものになしている。真実性は仏の側に帰し如来回施の道を開いている。かかる観点から二河譬のこの点に着眼していることが窺われる。親鸞の願往生心の見方を白道の釈と勘合してみれば、衆生の発起した願往生心が如何に成行かという方向から見る視点と、本来の清淨願往生心は如来の回向心であるとして招喚の地点におき、そこで語り得るものとし、更にこの地点から翻つて衆生の願往生心を否定するという視点が有り、即ち二重の方向で重層的に見ていることが看取される。この解釈の意義、従つてそ

親鸞における二河譬の意義(菘 島)

の信の構造と動態について精しく論究されねばならないが、今は化身土巻を顧慮するとき一層明らかになるということを指摘するに止めておきたい。因みに、親鸞自らの上でこの矛盾の逢着とその解決には長い年月を閲したことが思惟される。

第二点として勅命という一言しておきたい。親鸞は發遣・招喚の処に語る「即自正身心」の句を「即ち自ら正しく身心に當てて」と訓んでいる。これは招喚を勅命とする把握に鑑みると、窮地にある孤独の旅人が身心を挙げて弥陀の喚び声を聞き決定するということの意味を深めていると思われる。招喚を欲生釈、行巻及び尊号真像銘文¹¹⁾の六字釈で勅命と言ひ表わしている。この發遣・招喚の事柄は二河譬の眼目であり、二河譬の解釈の軸になつている。

親鸞はこの二河譬の文について、そこに自身の体験の投影を見ており、法然との出会いの出来事を推求し内実化していく上での重要な一依拠となつたものであることが窺われる。そのことは今瞥見した如く信の生成過程を探ねていく上で極めて示唆的であるということとを意味している。そしてこの文は勅命という表現に示される如来回向の思想を導き出し具体的表現を与えることになつた原基ではなかつたかとも推測されるのである。

- 1 17 順次出拠の頁数を記すと 1 真聖全Ⅱ、四八、五五、六七 2 四五七 3 四五二 4 五〇九 5 六一八 6 七〇六 7 定本親鸞聖人全集13 | 四〇 8 真聖全Ⅰ、五三九 大正37 | 二七三 c 9 善導の意に相応するものとして、註11とともにこの訓み方に従つた。10 訓点は広本の方が親鸞の立場をより鮮明にしているかと思われる。11 即ち自ら身心を正当にして。12 真聖全Ⅱ、五八八、(参考文献省略)